

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

1日

赤口 亢

旧8月29日

火曜

妙法蓮華経勸持品第十三

かんじ ほんにじゅうぎょうげ

勸持品二十行の偈

「迫害にも負けず法華経を弘める誓願」

お釈迦さまは、他の仏国土で弘教をすると誓った菩薩たちに応えず、暗にこの娑婆世界での弘経を勧められました。

そこで菩薩たちは如何なる迫害大難が襲うともこれを忍んで法華経を弘めようとの誓願を「二十行の偈」に結んだのです。

この「二十行の偈」は日蓮聖人の法華色読（法華経の実践）のよりどころでもあり、この色読によって仏使上行の自覚が生れたのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰
2024年

10月

2日

先勝 氏

旧8月30日

水曜

妙法蓮華経勸持品第十三

う しよ む ち にん

有諸無智人

「偏った考えで正しい教えを受け入れられない人」

無智の人とは智慧のない人という意味ではなく、
人生の本当の意味をわきまえていない人という
意味です。

自分の偏った考えに基づきものを見ているので
正しい教えを納得できず、悪口を言い罵り、教
えが広まる妨げをするのです。

このような人を「俗衆増上慢」といいます。

「俗衆(ぞくしゆ)」とは、僧侶ではない世俗の普通
の人という意味です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

3日

先負 低

旧9月1日

木曜

妙法蓮華経勸持品第十三

悪世中比丘

あく せ ちゆう びく

じゃちてんごく

「邪知諂曲の出家者」

出家をして仏教を世に弘める者が「比丘」です。

世の中が乱れると人心も乱れ、教えを弘める

「比丘」もその影響を受け、名誉欲や物欲が膨ら

み、自分勝手なことを考えるようになります。

「邪知(邪な智慧)」「諂曲(ねじ曲がった心)」を持

ち、正しい教えを弘める行者を迫害する「道門

増上慢」といわれます。

悟りを得たと思ひ込み、自分が一番正しいと思

いあがっている出家者のことです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

4日

仏滅 房

旧9月2日

金曜

妙法蓮華経勸持品第十三

じ い ぎょう しん どう
自謂行真道

「人々に聖者として崇められる出家人」

俗世間の塵が届かない静かで清らかな場所にて
一人で迷いを払う修行に打ち込む者は、自分一
人が悟り、世間の人々は迷っていると軽んじ、
他者を救う心も失っています。

そして、自分は一番だと思いががり、正しい教
えを弘める者を迫害します。

人々に聖者として崇められ、その発言力も強い
出家人は、法華経の最大の迫害者「僭聖（せんしょう）
増上慢」といわれます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

5日

大安 心

旧9月3日

土曜

妙法蓮華経勸持品第十三

三類さんるいの強敵ごうてき

「法華経の行者に対して怨をなす三種類の邪人」

「三類の強敵」とは、法華経の修行者に対して怨をなす三種類の邪人をいいます。

『勸持品』に説かれる三類とは、①俗衆増上慢 ②道門増上慢 ③僭聖増上慢のこと。

『勸持品』には、八十万億那由他の諸菩薩の法を弘める誓言が説かれており、仏滅後の恐怖悪世の中において、法華経を弘める者は必ず「三類の強敵」に出会うであろうことが説示されています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

6日

赤口 尾

旧9月4日

日曜

妙法蓮華経勸持品第十三

とう じゃく にん にく がい
当著忍辱鎧

「迫害に耐え得る信心の鎧」

「三類の強敵」の迫害に耐え得る「忍辱の鎧」とは、仏さまを敬い、信じ切る心のこと。

丈夫な鎧を着れば矢も弾も跳ね返します。

仏さまの教えを疑うことなく、信じ切っていれば、迫害を与える相手の誤った考えを正し、救い上げようという思いも生じます。

あらゆる侮辱や迫害に耐え忍んで、怒りの心をおこさない忍辱の心をしっかり持っていれば、自分の心に何ら動揺を受けずに済むはずです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

7日

先勝 箕

旧9月5日

月曜

妙法蓮華経勸持品第十三

がふ あい しんみよう たん じゃく む じようどう

我不愛身命 但惜無上道

「身命を惜しまず無上道を行く」

この法華経を世に弘めて、すべての人を救おうという大きな目的を達成するためには、身命を惜しまず、この上ない仏の教えを求める道を行くという決意を示した言葉です。

無上道を弘めるために身命を掛けることは必要ですが、むやみに命を捨ててはなりません。

教えを弘めるために生き延びなくてはならないときには、逃げる勇気も必要です。

身命を仏道に捧げ一生を送るのが大切です。

妙法蓮華經勸持品第十三

唯願不為慮	於仏滅度後	恐怖惡世中	我等當広説	有諸無智人	惡口罵詈等
及加刀杖者	我等皆當忍	惡世中比丘	邪智心諂曲	未得謂為得	我慢心充滿
或有阿練若	納衣在空閑	自謂行真道	輕賤人間者	貪著利養故	与白衣説法
為世所恭敬	如六通羅漢	是人懷惡心	常念世俗事	仮名阿練若	好出我等過
而作如是言	此諸比丘等	為貪利養故	説外道論議	自作此經典	誑惑世間人
為求名聞故	分別説是經	常在大衆中	欲毀我等故	向国王大臣	婆羅門居士
及余比丘衆	誹謗説我惡	謂是邪見人	説外道論議	我等敬仏故	悉忍是諸惡
為斯所輕言	汝等皆是仏	如此輕慢言	皆當忍受之	濁劫惡世中	多有諸恐怖
惡鬼入其身	罵詈毀辱我	我等敬信仏	當著忍辱鎧	為説是經故	忍此諸難事
我不愛身命	但惜無上道	我等於來世	護持仏所囑	世尊自當知	濁世惡比丘
不知仏方便	隨宜所説法	惡口而擻蹙	数数見擯出	遠離於塔寺	如是等衆惡
念仏告救故	皆當忍是事	諸聚落城邑	其有求法者	我皆到其所	説仏所囑法
我是世尊使	処衆無所畏	我當善説法	願仏安穩住	我於世尊前	諸來十方仏

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

8日

寒露

友引 斗

旧9月6日

火曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

四安楽行

し あん らく ぎよう

「法華経を説くための四つの方針」

お釈迦さまは文殊菩薩の問いに応える形で、
初心の菩薩が法華経を説くための四つの方針
「四安楽行」を説かれました。

①身安楽行：修行者の振舞いについて

②口安楽行：法を説くときの心得

③意安楽行：大慈悲心を以て法を説く

④誓願安楽行：一切衆生を救う誓願を持つ

『勸持品』は外からの難、『安楽行品』は自らの心の中に起こる難について説かれます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

9日

先負 女

旧9月7日

水曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

行処 ぎょう しよ

「菩薩の振舞い」

「身安楽行」の行処、菩薩の振舞いの心持ち。

- ①辱めを忍び瞋らない
- ②我執なく仏意に順ずる
- ③他者を苛立たせない
- ④心に動揺を受けない
- ⑤自分が特別だと思わない
- ⑥諸法の眞実の姿を見極める
- ⑦冷静に判断して行う。

これら振舞いを省み過ぎることが大事です。

ただし振舞いだけを正すのではなく、これに心が伴わなければなりません。

その心持ちが『安楽行品』に説かれています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

10日

仏滅 虚

旧9月8日

木曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

しよ しん ごん しよ

初親近処

「菩薩が親しく接する相手に関する注意事項」

「身安楽行」の親近処の第一、接する相手に関する注意事項です。

- ① 権力者に取り込まれない
- ② 異教徒・思想家に惑わされない
- ③ 賭け事をしない
- ④ 畜肉・殺生をしない
- ⑤ 世俗から離れた修行者に振り回されない
- ⑥ 女人・邪淫をしない
- ⑦ 不男に近づかない
- ⑧ 一対一の説法で独りよがりにならない
- ⑨ 女性の気を引くようなことをしない
- ⑩ 小児性愛・同性愛に陥らない
- ⑪ 禅定の鍛錬

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

11日

大安 危

旧9月9日

日 金曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

第二親近処

「菩薩の心の持ちよう」

「身安楽行」の親近処の第二。

すべての存在するものは、実体があるとも、逆に存在しないともとらわれない「空」であり、差別を離れ平等であり、あるがままの相であることが菩薩の心の持ち方です。

初親近処では「危うきに近づかないように」と具体的な分別を説き、第二の親近処では「差別から離れて、平等に、あるがままに」接するようにと慈悲心を説かれました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

12日

赤口 室

旧9月10日

土曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

く あん らく ぎよう

口安楽行

「菩薩の言動における制限」

四安楽行の二つ目、「口安楽行」は、他者への非難・敵視・争論の制限です。

他人の言動や他の經典の過失を説かず、法師を軽んぜず、他人の好悪長短を説かず、求める人には小乗の教えでなく大乘のみを説いて仏の智慧を獲得させようと努めることです。

一人が説けば、それを聞いた者がまた他者に説き、教えの功德は尽きることなく大きな恵みを広げていくことができます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

13日

先勝 壁

旧9月11日

日曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

い あん らく ぎよう

意安楽行

「平等に法を説く」

四安楽行の三つ目「意安楽行」は、平等な説法。

嫉妬・へつらい・瞋恚・輕慢・邪偽の心を捨て、法を戲論せず、人々に疑いや後悔させず、大慈悲心をもって一切衆生に平等に法を説くことです。

平等に説くとは、誰にでも同じように説くということではなく、さまざまな機根や境遇にある人々それぞれに応じて説き、皆すべてを仏の道に導き入れるということです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

14日

友引 奎

旧9月12日

月曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

せい がん あん らく ぎよう

誓願安楽行

「上求菩提 下化衆生の大慈悲心」

四安楽行の四つ目、「誓願安楽行」とは自らが
仏を目指すとともに、すべての人々も仏に導こ
うとする大慈悲心。

末法の時に法華経を持つ者は、在家・出家とも
に手を取り合い、すべての人が力を合わせて、
教えを弘めなければなりません。

そして世界ぜんたいが幸せになるように、この
世の中が仏国土となるようにと誓願を持つ者を
諸仏が守護してくださるのです。

妙法蓮華經安樂行品第十四

爾時。文殊師利法王子菩薩摩訶薩。白仏言世尊。是諸菩薩。甚為難有。敬順仏故。發大誓願。於後惡世。護持誦誦。說是法華經。世尊。菩薩摩訶薩。於後惡世。云何能說是經。仏告文殊師利。若菩薩摩訶薩。於後惡世。欲說是經。當安住四法。一者安住菩薩行處。親近處。能為衆生。演說是經。文殊師利。云何名菩薩摩訶薩行處。若菩薩摩訶薩。住忍辱地。柔和善順。而不卒暴。心亦不驚。又復於法。無所行。而觀諸法如実相。亦不行不分別。是名菩薩摩訶薩行處。云何名菩薩摩訶薩親近處。菩薩摩訶薩。不親近國王王子。大臣官長。不親近諸外道。梵志。尼嬰子等。及造世俗文筆。讚詠外書。及路伽耶陀。逆路伽耶陀者。亦不親近。諸有凶戲。相叔相撲。及那羅等。種種變現之戲。又不親近旃陀羅。及畜猪羊掩狗。畋獵漁捕。諸惡律儀。如是人等。或時來者。則為說法。無所及望。又不親近求聲聞。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。亦不問訊。若於房中。若經行處。若在講堂中。不共住止。或時來者。隨宜說法。無所及求。文殊師利。又菩薩摩訶薩。不応於女人身。取能生欲想相。而為說法。亦不染見。若入佗家。不與小女。処女寡女等共語。亦復不近。五種不男之人。以為親厚。不独入佗家。若有因縁。須独入時。但一心念仏。若為女人說法。不露齒笑。不現胸臆。乃至為法。猶不親厚。況復余事。不染畜年小弟子。沙弥小兒。亦不染與同師。常好坐禪。在於閑處。修撰其心。文殊師利。是名初親近處。復次菩薩摩訶薩。觀一切法空。如実相。不顛倒。不動。不退。不転。如虚空。無所有性。一切語言道断。不生。不出。不起。無名。無相。実無所有。無量。無辺。無礙。無障。但以因縁有。從顛倒生。故説常樂觀如是法相。是名菩薩摩訶薩第二親近處。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言

〈略〉

又文殊師利。如来滅後。於末法中。欲說是經。応住安樂行。若口宣説。若説經時。不染説人。及經典過。亦不輕慢。諸余法師。不説佗人。好惡長短。於声聞人。亦不称名。説其過惡。亦不称名。讚歎其美。又亦不生。怨嫌之心。善修如是安樂心故。諸有聽者。不逆其意。有所難問。不以小乘法答。但以大乗。而為解説。令得一切種智。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言

〈略〉

亦不為多説。文殊師利。是菩薩摩訶薩。於後末世。法欲滅時。有成就。是第三安樂行者。説是法時。無能恼乱。得好同学。共誦誦是經。亦得大衆。而來聽受。聽已能持。持已能誦。誦已能説。説已能書。若使人書。供養經卷。恭敬尊重讚歎。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言

〈略〉

又文殊師利。菩薩摩訶薩。於後末世。法欲滅時。有受持法華經者。於在家出家人中。生大慈心。於非菩薩人中。生大悲心。応作是念。如是之人。則為大失。如来方便。隨宜説法。不聞不知不覺。不問不信不解。其人雖不問。不信不解是經。我得阿耨多羅三藐三菩提時。隨在何地。以神通力。智慧力。引之令得。住是法中。文殊師利。是菩薩摩訶薩。於如来滅後。有成就。此第四法者。説是法時。無有過失。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

15日

先負 婁

旧9月13日

火曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

しよてんちゆうや

じよういほうこ

に えい ご し

諸天昼夜

常為法故

而衛護之

「諸天は昼夜法華経を弘める者を守護する」

天上界の神々は昼も夜も、仏さまの尊い教えが世に弘まることを念願し、法を伝える人を護り、その教えの説き方に欠点や間違いがないようにと導いてもくださいます。

法華経を弘める人たちが様々な迫害に遭いながらも、現在まで教えが伝わり、私たちがそれを信じていることができるのも、諸天の守護があったからだといえるでしょう。

その背後には仏さまの大慈悲があるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

16日

仏滅 胃

旧9月14日

水曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

ぜ ほけきよう

是法華経

お むりようこくちゆう

於無量國中

ない しみようじ

乃至名字

ふか とくもん

不可得聞

「法華経の名を聞くだけでも有難い」

たくさんの国の中に於いて法華経の名を聞くだけでもまれなことです。

法華経に値うことができた尊い縁を無駄にすることがないように、この教えを信じ持ち、身に行わなければなりません。

そのための振舞いや心持ちの注意事項が「四安楽行」です。

「四安楽行」が身に付くように『安楽行品』を熟読し、法華経の実践をしたいものです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

17

日

大安 昴

旧9月15日

木曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

けい

ちゆう

みよう

じゆ

髻中明珠の喩

たとえ

「真の勇者にのみ与えられる宝珠」

正しき教えをもって世を治める転輪聖王は、功績をあげた者に多くの褒賞を与えられます。

しかし、王の髻もどりの中に秘蔵する宝珠だけは、誰にも与えることはありません。

宝珠は王としての証であり、これを与えれば国中に騒乱が起こってしまうからです。

王は真の勇者にのみ宝珠を与えました。

「王」とはお釈迦さま、「宝珠」は法華経を指しています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

18日

赤口 畢

旧9月16日

金曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

ご おん ま

ぼん のう ま

しま

五陰魔

煩惱魔

死魔

「心の中の魔」

「五陰」とは、①色(感覚) ②受(感情) ③想(思想) ④行(意志) ⑤識(心の動き)。

この五つの心身の働きが人の心を縛って乱す「五陰魔」とされています。

「煩惱魔」とは、迷いのために目がくらみ正しい考えが理解できなくなることで。

「死魔」とは、最後に死が来るということにとらわれ、修行をあきらめてしまうこと。

「魔」は心の中にあるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

19日

先勝 齋

旧9月17日

土曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

た おん なん しん
多 怨 難 信

「法華経を説くと仇なす者があらわれる」

法華経はお釈迦さまがご自身の信じるところをありのままに説かれたので、理解し信じることが難しいのです。

理解できない者の中には、迫害し邪魔するものも出てきます。

そのため、お釈迦さまは法華経を容易に説くことはありませんでした。

そして今がその時期であると、法華経を説かれたのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

20日

友引 参

旧9月18日

日曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

秘密之蔵

「非常に奥深い最上の教え」

「秘密」とは、非常に奥深いこと。

お釈迦さまは生涯様々な教えを説かれてきましたが、一番大切な教えは最後に説かれました。

一番大切なことは心の中に深く留めておいて、説くべき時期を見極めて説かれたのです。

それが「秘密之蔵」＝法華経です。

様々な経典の中でも最上の教えであり、聞く側も決して軽々しく思うことなく、深く信じ、実践しなければなりません。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

21日

先負 井

旧9月19日

月曜

妙法蓮華経安楽行品第十四

にやくにん

めり

くそく

へいそく

若人悪罵 口則閉塞

「若し人に憎み罵られても、その口は塞がれる」

法華経を怨んで悪口を言うならば、その口が塞がれると示されています。

ある一瞬だけ悪口を言えないようになるというのではなく、永い時を経て悪口を言う者がいなくなるということなのです。

正しい教えが決して滅びることなく、今日まで伝わっているのは悪口が塞がれた証です。

暴力暴言による迫害があっても、仏天の守護により教えは受け継がれてきたのです。

妙法蓮華經安樂行品第十四

諸天昼夜。常為法故。而衛護之。能令聽者。皆得歡喜。所以者何。此經是一切。過去未來現在。諸仏神力。所護故文殊師利。是法華經。於無量國中。乃至名字。不可得聞。何況得見。受持誦誦。文殊師利。譬如強力。轉輪聖王。欲以威勢。

〈略〉

一切衆生。見賢聖軍。与五陰魔。煩惱魔。死魔共戰。有大功勳。滅三毒。出三界。破魔網。爾時如来。亦大歡喜。此法華經。能令衆生。至一切智。一切世間。多怨難信。先所未說。而今說之。文殊師利。此法華經。是諸如来。第一之說。於諸說中。最為甚深。末後賜与。如彼強力之王。久護明珠。今乃与之。文殊師利。此法華經。諸仏如来。秘密之藏。於諸經中。最在其上。長夜守護。不妄宣說。始於今日。乃与汝等。而敷演之。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言

〈略〉

天諸童子 以為給使 刀杖不加 毒不能害 若人惡罵 口則閉塞 遊行無畏

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

22日

仏滅 鬼

旧9月20日

火曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

じゅう じ ゆ じゅつ

従地涌出

「地から涌き出した菩薩」

他方の国土から来た多数の菩薩は、滅後の娑婆世界における弘経を願い出しました。

しかし、お釈迦さまはそれを制止しました。

そして大地の底から無量の菩薩が涌出します。

法華経をこの世に弘めるためには、他の世界から来た菩薩たちの力を借りるのではなく、この世界に生まれ、この世界で苦勞した私たち自身が弘教に努め、人びとを救わなければなりません。強調されているのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

23日

霜降

大安 柳

旧9月21日

水曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

し ぜん なん し
止善男子

「止^やみね善男子」

お釈迦さまは他土の菩薩たちの弘教の申し出を「止みね」と制止しました。

他土の菩薩の手伝いを断ったのは、この娑婆世界に住む菩薩たちに弘教に努めよと強く勧めるお釈迦さまの思いが込められています。

娑婆世界に住んでいた菩薩たちは、この「止みね」に発奮し、弘教に励む思いを強くしました。

しかしその時、大地が震裂し、たくさんの菩薩が涌出します。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

24日

赤口 星

旧9月22日

木曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

じ ゆ ぼ さつ
地涌の菩薩

「大地を貫いて涌き出した菩薩たち」

大地が震裂し無量百千万億の菩薩が涌出したというのは、大きな障害も排除し、あらゆる苦しみを乗り越えて、人々を救う力を身に着けた菩薩たちが現れたということです。

固い地面を貫くために、辛苦に堪え努力を重ねてきたことによって、強さと優しさが具わり、人々に寄り添いつつ救い導くことができる地涌の菩薩たちに、お釈迦さまは法華経を弘めることを託されたのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

25日

先勝 張

旧9月23日

金曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

眷属

けん

ぞく

「従者」

地涌の菩薩たちはたくさんの従者を連れている者や、少人数の従者を連れている者、あるいは一人で来た者もいました。

教えを弘める際には迫害に遭い邪魔をする者も現れますが、教えに感化され、付き従う者も現れるものです。

弘教に努めていれば、最初は一人で修行している時期があり、やがて信者の集団が形成され大きな力になることもあるということです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

26日

友引 翼

旧9月24日

土曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

い によ はん にち

謂如半日

「五十小劫の永い時間を半日にしか感じない」

地涌の菩薩たちは五十小劫という非常に長い時間、お釈迦さまと多宝如来を讃嘆されました。虚空会の聴衆も五十小劫の間、坐っていました。が、半日ほどの時間にしか感じませんでした。魂を打ち込み、仏さまを拝し、信仰の喜びを感じている時間に長短はないということです。また、世間の習慣や風俗は短期間で変わっても、正しい教えは永久に変わらないこともあらわしています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

27

日

先負 軫

旧9月25日

日曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

上行菩薩

じょう

ぎょう

ぼ

さつ

「この上ない仏の悟りを目指す菩薩」

「上行」とは、この上もない最も善い行い、つまり仏に成ろうとすることを意味します。

これは「四弘誓願」の「仏道無上誓願成」、この上ない仏の悟りを目指す誓いに通じます。

日蓮聖人は自らも仏を目指し、人々も仏に成れるように導くため、法華経を弘めようという大理想を持って「上行菩薩再誕の自覚」をお持ちになりました。

末法の人々を救おうという大きな覚悟です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

28日

仏滅 角

旧9月26日

月曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

無辺行菩薩

む へん ぎよう ぼ さつ

「廣大無辺なる教えを学ぼうと努める菩薩」

「無辺行」とは、廣大無辺なる教えを学ぼうと努めることを意味します。

それも仏さまの教えを、仏さまと同じように理解できるまで学ぶということです。

これは「四弘誓願」の「法門無尽誓願智」、仏の教えを自らの智にする誓いに通じます。

たくさんのお経や書物を学ぶことも必要ですが、一字でも一句でも深く味わい、自らの血肉とすれば、深い悟りに繋がっていくはずですよ。

妙法蓮華經從地涌出品第十五

爾時佗方国土。諸來菩薩摩訶薩。過八恒河沙數。於大眾中。起立合掌作禮。而白仏言。世尊。若聽我等。於仏滅後。在此娑婆世界。勤加精進。護持誦誦。書寫供養。是經典者。當於此土。而広説之。爾時仏告。諸菩薩摩訶薩衆。止善男子。不須汝等。護持此經。所以者何。我娑婆世界。自有六万。恒河沙等。菩薩摩訶薩。一一菩薩。各有六万。恒河沙眷屬。是諸人等。能於我滅後。護持誦誦。広説此經。仏説是時。娑婆世界。三千大千国土。地皆震裂。而於其中。有無量千万億。菩薩摩訶薩。同時涌出。是諸菩薩。身皆金色。三十二相。無量光明。先尽在。娑婆世界之下。此界虚空中住。是諸菩薩。聞釈迦牟尼仏。所説音声。從下發來。一一菩薩。皆是大衆。唱導之首。各將六万。恒河沙等眷屬。況將五万。

〈略〉

亦皆默然。五十小劫。仏神力故。令諸大眾。謂如半日。爾時四衆。亦以仏神力故。見諸菩薩。氣滿無量。百千万億国土虚空。是菩薩衆中。有四導師。一名上行。二名無辺行。三名淨行。四名安立行。是四菩薩。於其衆中。最為上首。唱導之師。在大衆前。各共合掌。觀

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

29日

大安 亢

旧9月27日

火曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

じょう

ぎょう

ぼ

さつ

浄行菩薩

「心が浄く煩惱がない菩薩」

「浄行」とは、心が浄く煩惱がなくなるということ
とを意味します。

これは「四弘誓願」の「煩惱無数誓願断」、あらゆる
煩惱を断じていく誓いに通じます。

迷いが少しでもある間は心が穢れています。

人間の迷いは数限りないものです。

仏さまが人々の迷いを取り除き、悟りに導くと
説かれている教えを信じ、清浄になれるよう努

めてまいりましょう。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

30日

赤口 氏

旧9月28日

水曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

あん りゆう ぎよう ぼ さつ

安立行菩薩

「人々の心を安らかにする菩薩」

「安立」とは、人々の心を安らかにすることを意味します。

これは「四弘誓願」の「衆生無辺誓願度」、すべての衆生を救う誓いに通じます。

人々がそれぞれの立場において、よりよく生きられるように、平和で幸せになれるようにと道を示し、悟りの世界へと渡し、導くことです。

仏道を知らない多くの衆生をも導かねばならないので、大変困難な誓願です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

10月

31日

先勝 房

旧9月29日

木曜

妙法蓮華経従地涌出品第十五

しょう どう し し

唱導之師

「皆を励まし善い道に入れる導師」

「唱導」とは、皆を励まし善い道に入れること。

唱えるとは励ますことで、自分が先に立って導くだけではなく、励ましながら伴走するということです。

上行・無辺行・上行・安立行の四菩薩は、無量に涌出した地涌の菩薩の唱導師です。

「四弘誓願」の通り、道を示し、煩惱を断じさせ、智慧を身に着けさせ、仏の悟りに導いてくださるのです。

妙法蓮華經從地涌出品第十五

爾時佗方国土。諸來菩薩摩訶薩。過八恒河沙數。於大眾中。起立合掌作禮。而白仏言。世尊。若聽我等。於仏滅後。在此娑婆世界。勤加精進。護持誦誦。書寫供養。是經典者。當於此土。而広説之。爾時仏告。諸菩薩摩訶薩衆。止善男子。不須汝等。護持此經。所以者何。我娑婆世界。自有六万。恒河沙等。菩薩摩訶薩。一一菩薩。各有六万。恒河沙眷屬。是諸人等。能於我滅後。護持誦誦。広説此經。仏説是時。娑婆世界。三千大千国土。地皆震裂。而於其中。有無量千万億。菩薩摩訶薩。同時涌出。是諸菩薩。身皆金色。三十二相。無量光明。先尽在。娑婆世界之下。此界虚空中住。是諸菩薩。聞釈迦牟尼仏。所説音声。從下發來。一一菩薩。皆是大衆。唱導之首。各將六万。恒河沙等眷屬。況將五万。

〈略〉

亦皆默然。五十小劫。仏神力故。令諸大眾。謂如半日。爾時四衆。亦以仏神力故。見諸菩薩。氣滿無量。百千万億国土虚空。是菩薩衆中。有四導師。一名上行。二名無辺行。三名淨行。四名安立行。是四菩薩。於其衆中。最為上首。唱導之師。在大衆前。各共合掌。觀